産卵シーズンを迎えたウミガメ。メスの甲羅は丸みを帯びている。（奥右・提供）

（アオウミガメ）の甲羅。メスは小さく、オスは細長くなる。（奥左・提供）

月中旬、広東省徐聞県にある普善庵という寺の僧侶がウミガメを助けて海にもどしたという記事を掲載していた。

同紙によると、商人がウミガメをレストランに売ろうとしているのを知った僧侶が4500元（約7万2千円）で買い取り、地名や日付などを甲羅に記して翌日海に放した。

朝日新聞が任さんに問い合わせてもらったところ、カメを救ったのは尼僧の釈さんと分かった。寺関係者の話では、同寺はウミガメを何頭も救ってきたが、今回は特別に大きく、みなでお金を集めて買い取り、寺で一晩保護したうえ、海に返した。放流してもウミガメは何回か岸に戻ってきたが、やがて海に消えた。放流地の港では、数百人の群衆が沖へ向かうカメを見守り、お祭り騒ぎだったという。

山口さんは「中国本土で放されたウミガメが小笠原まで泳いできたこと自体、非常に珍しい。しばらくセンター内で保護してさらに産卵を見守り、8月上旬をめどに海に返したい」と話している。

同センターの山口真名美所長によると、メスのアオウミガメで、甲羅の長さは約90センチ、体重は120キロ余り。父島・二見湾内の砂浜に14日夜、上陸した。翌日も同じ場所に上陸したが、砂が少なく産卵できない浜だったため保護したところ、16日に77個の卵を産んだ。

小笠原では、アオウミガメが漁業の対象になっているが、カメ漁師に捕まることもなかった。

甲羅には「広東」「普善庵」「徐聞」などの漢字が赤く彫り込まれていた。山口さんは、知人で北海道大大学院に留学中の中国人女性、任敏儀（ビンギ）さん(23)に相談した。任さんがインターネットで調べたところ、中国の現地紙「羊城晩報」が今年1

2006
BONIN
OGASAWARA
NESTING
Recovery +
POST-NEST
SAT TAG

中国で命拾い 日本で産卵

海ガメはるばる3000キロ

「食用」寸前 僧侶助ける

中国・広東省で危うく食用になるところを地元の僧侶に救われ、海に返されたウミガメが今月中旬、小笠原諸島（東京都小笠原村）の父島に上陸し、産卵した。NPO法人エバーラスティング・ネイチャー（本部・横浜市）が運営する小笠原海洋センターが、カメの甲羅に書かれた地名や日付をもとに確認した。放流地とは直線距離で約3千キロ離れており、カメを救った尼僧の釈文敬（シーウェンジン）さん(82)は「カメが日本で無事でいることが分かって、とてもうれしい」と話している。

（山本智之）